

2021年5月7日(金)

老球の細道608号

コロナ禍での「私のバスケットボール」あれこれ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「黄金週間」(ゴールデンウィーク)もあっという間に終わった。そもそも「ゴールデンウィーク」の名称は、映画会社の大映が松竹と競作して1951年(昭和26年)に同時上映となった『自由学校』が、大映創設以来最高の売上(当時)を記録し、正月映画やお盆映画以上の興行成績を残したことで、この時期に観客を多数動員し活性化することを目的として、当時の大映役員によって作成された宣伝用語であり、和製英語である。

会津では「来て」という観光案内のポスターがあるが、東京では「来ないで」とある。しかし、今や会津も「来ないで」だろう。ここに来てどうなってしまったのか。今や10万人あたりの感染者数は東京を越えているというではないか。

しかし、そんな状況下でもバスケットボールの歩みは少しずつ進んでいる。このゴールデンウィーク前後の私のバスケットボールアラカルトを紹介したい。

【県審判長 芳賀聡氏(前会津協会審判長)のBリーグ審判での雄姿】

Bリーグもカンファレンス順位が決まり、いよいよプレーオフの正念場に突入する。そんな折、4月24日(土)宇都宮ブルックスアリーナで東地区1位の宇都宮対3位川崎の試合がBS1で放映された。興味ある試合なのでテレビで観ていたら、なんと芳賀氏が笛を吹いているのではないかと。優勝候補同士の重要なゲームなので主審(クルーチーフ)はプロレフリーの加藤氏であるが、芳賀氏もクルーの一員として堂々とジャッジメントをしていた。特に日本のエースと言われる比江島選手に対する「アンスポ」は微妙な判定であったが、ひるむことなく堂々とアンスポをコールしていた姿は流石であった。

会津バスケットボール協会の長い歴史の中で、このような大舞台でレフリーをする人材が輩出することなど想像できなかった。芳賀氏個人の努力はもちろんであるが、思い起こせば歴代地区審判長の末永充行先生、山田拓先生等先人たちの審判育成への地道な努力が、今ここに来て芳賀氏によって花が開き、会津地区審判委員の夢が目標へと変わった。

【バスケットボールクリニック】

こんな状況の中でも私にクリニックを依頼してくれたチームがあった。坂下ミニ、ザベリオ、会津高校である。規律の文化が確立したチームを指導するのは至福の時間である。どのチームも目指すところが明確であり新たな意気込みが感じられた。私もワクワクしながら、唾を飛ばさないで受けない爺様ギャグを飛ばしながらコートに立った。

テーマは色々であったが、共通して話したことは、目標は「アップセット」を起こす、今の自分たちよりも強いチームを負かすこと、そして願うべき「最高の自分」「最高のチーム」になること。そのための3つのミッションは「基礎基本を徹底する」「チームプレイを確立する」そして最後に「あきらめない」こと。99回負けても最後の1回に勝てばアップセットは起こせる。最後に勝った者が真の勝利者である。